麻帆良友人帳

岸　劉生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻帆良友人帳

【Ｎコード】
Ｎ４７３１Ｚ

【作者名】
岸　劉生

【あらすじ】
夏目友人帳を持つ少年、夏目貴志は祖母譲りの美貌と妖力を持ち、ニャンコ先生と共に妖しに名前を返す日々を送っていた。
そんなある時、時神という妖しに名前を返した際にそのお礼として、なんと異世界に飛ばされてしまう夏目とニャンコ先生。
そこはなんと魔法先生ネギま！の世界であった。
夏目とニャンコ先生は元の世界に帰る方法を見つけながら、この

世界で困っている人や人外を助けていくのであったが――――――。

果たして夏目とニャンコ先生は元の世界に帰れるのであろうか？

第零章　時神の贈り物

「はぁ、はぁ、はぁ！！」

夕暮れに染まる雑木林を制服姿の少年が息を切らせながら走っていた。薄い茶色の髪を靡かせ、涼しげな美貌は珍しく焦りの色を浮かばせていた。

後ろからは大きな黒い影を纏った妖しが、その背に追いすがるようにして追ってきていた。

『返せ！！　我が名をぉ～～～～～！！！！！　ナツメレイコォ～～～～！！！！』

禍々しい響きを含んだ声が少年の五感に突き刺さる。

「はぁ、はぁ！！　だからおれはレイコさんじゃないんだって！！何度言えば分かるんだ！！」

少年は振り向き様にしつこく追ってくる妖しにそう言い放つも、

『嘘を申すな！！　その姿に身体に流れる妖力！！　まさにレイコそのものではないか！！』

と、全く聞く耳を持たない。

少年の名は夏目貴志といい、世界でも珍しい人ならざる物を見る能力を持っている。また祖母である夏目レイコ譲りの強い妖力を持ち、祖母が打ち負かした妖怪の名前が記されている“夏目友人帳”

を譲り受けており、そのせいか度々妖怪に襲われるのであった。

襲ってくる妖怪は二種類に分かれる。

一つは友人帳に名前の書かれた妖怪を子分として従えようと奪いに来る妖怪。

もう一つは友人帳に書かれた名前を返しにもらおうとやって来る妖怪。

今回の妖怪は間違いなく後者だ。

しかし、この妖怪はどうやら我を失っているようで、夏目の言葉に耳を貸す様子もなく、ただひたすら名前を返せと連呼するばかり。

どうにも要領も得ず、末には夏目に襲いかかろうとしたので、やむを得なく逃げ出したが・・・・・。

よほどの執念なのか、諦める気配はない。

夏目が雑木林を抜けたところにある石段を駆け下りているときに、

「夏目〜」

と、呑気な声で夏目の名を呼びながら、一匹の丸まる太った不細工な招き猫が上から落ちてきて、器用に夏目の肩に捕まる。

「にゃ、ニャンコ先生！！　今までどこに行ってたんだ！！」

「あ〜、ちょっとな。仲間の妖しから酒飲みの誘いを受けていてな。

しばしの間参加していたのだ。ところで夏目。何故そんなに急いでおるのだ？」

「馬鹿！！　後ろを見てみろ！！　後ろを！！」

と、どこまでも間が抜けているニャンコ先生を夏目は叱咤する。

ニャンコ先生は振り返りもせずに、

「ん？　この妖気は懐かしいな。これは時を司る妖し“刻音”ではないか」

見事妖怪の名を言い当てた。

「刻音？　知り合いなのか？」

「あぁ、昔からのな。この私と同等の力を持つ妖しで、時や次元を自在に操る能力をもっておる。以前は女童の姿であったが、長年の恨み辛みに醜く変化してしまったようだな。さっさと名前を返してやれ」

懐かしむように背後に迫る妖しについて語るニャンコ先生。そんなニャンコ先生を夏目は走りながら横目で見やり、

「そうなのか。だ、だが名前を返すにもこう正気を失っていては無理だ！！」

「はぁ～、仕方ないの。私が手を貸してやろう。報酬は晩ご飯だぞ」

ニャンコ先生はヤレヤレという風に首を振ると、夏目の肩からバ

バッと飛ぶと、本来の姿である巨大な白い獣の姿に化け、黒い影に襲いかかる。

「夏目！！　私が足止めしている間にどこか人気のない場所まで行け！！　こいつの妖力は辺りに影響を及ぼすからな！！」

「わ、分かった！！」

夏目はチラリとニャンコ先生の方を一瞥すると、この先にある原っぱの方まで駆けていく。

その後ろではニャンコ先生と黒い妖しが争っていた。

『その姿は斑か！！！　何故我の邪魔をする！！』

「悪いな。私はあいつの用心棒なのでね！！　しばらく足止めさせてもらうぞ！！　刻音！！」

ニャンコ先生と刻音はもつれ合うようにして争いあったのであった。

一方、夏目はというと・・・・・・。

人家から離れた場所にある原っぱへとやって来ており、その原っぱの中央で激しく脈動する心臓を抑えるため深く深呼吸し、気を落ち着かせようと精神統一を開始する。

それからナップザックに入れた友人帳を手に取り、静かにそれを開くと。

「我を守りし者よ。その名を示せ」

すると、一人でにページが捲れていき、そのうちの一枚の紙がピタッと、まるで見えない糸にでもつり上げられているかのように垂直に立った。

夏目はそれを破るのと同時に、刻音に噛みついたニャンコ先生が原っぱへと転がり込むようにしてやって来た。ニャンコ先生は刻音から離れるといつもの招き猫姿に戻り、夏目のすぐ傍まで戻ってくる。

「夏目、足止めはしといたぞ。後はお前の役目だ。さっさっと終わらせろ」

「あぁ、分かってるさ」

夏目は先程より禍々しくなった刻音を真っ直ぐに見つめた。刻音はどうやらニャンコ先生により手負いを負ったらしく、憎々しげに紅く光る瞳をニャンコ先生に向ける。

『おのれぇぇぇぇ！！　憎い、全てが憎い。妖しも人の子も。そして我を誑かした夏目レイコ。貴様もだぁぁあああ！！！！』

刻音の爆ぜるような怒りを一心に受けながらも、夏目は表情を崩さず、刻音を真摯な眼差しで見据え、

「刻音、君の名を返そう。受け取ってくれ」

夏目はちぎった紙を口に咥え、フゥと息を吹きかける。すると、

紙面に書かれた文字が吐き出された息と共に飛び出て、刻音の額に吸い込まれるようにして消えていった。

その直後、夏目は刻音と祖母が初めてあった時の記憶の紙片が頭に流れ込んだ。

【刻音の記憶】

「お前、人の子か？　我が見えるのか？」

廃駅の傍に建てられた祠の上に腰掛けていた少女の姿をした妖しは、自分のことを真っ直ぐに見つめてくる茶色の髪を持つ美少女に向かって話しかけた。

これは昔の刻音とレイコさんであった。

「えぇ、見えてるわよ。ちゃーんとね」

レイコさんは不敵な笑みを浮かべて、刻音の問いに答える。

「ただの人が何故この場所に来た？　ここは我が時を司る妖し、時神が治める土地ぞ」

「さぁね。私はただなんとなく来ただけだから。それにしても、あんたこんな寂れた場所に一人いて寂しくないの？」

レイコさんはどこか憂うような表情を浮かべ、刻音に問い返した。

「寂しい？　さぁな・・・・・・。我は時を司る妖し故、時間という概念がない。ただひたすら移りゆく季節を見ながら過ごすだけ。

そのような感情を抱いた覚えもないわ。そういうお前は？　風の便りによるといつも一人でいるそうではないか」

「私は人間が嫌いなのよ」

「ほっ、人間が嫌い、か。面白いことを申す。人の子なのに人が好かんとな？」

レイコさんの発言に刻音は驚いた声を出す。

それからしばらく黙っていたが、唐突にレイコがこう切り出した。

「・・・・・・時神だっけ？　あんた、私の子分になりなさい」

「子分とな？　何故この我が人に付き従わなければならんのだ？」

「いいから。先に攻撃を受けた方が負けよ。じゃあ、行くわよ」

「ほっ！！　ま、待って！！　いきなり言われても心の準備が・・・・・・、イダッ！！！」

と、勝手にレイコさんが宣戦布告した後、刻音は呆気なくレイコさんの一撃を食らってしまい敗北した。

「はい、じゃああんたは今日から私の子分よ」

「・・・・・・不意打ちだった癖に。大体神にも連なるほどの妖しである我に向かって・・・・・・」

と、ぶつくさ呟きながらも名前を書いた紙をレイコさんに手渡す

刻音。額には大きな絆創膏が×印に貼られていた。

刻音から渡された紙を見たレイコは、

「へぇ・・・・・・、あんた“刻音”って言うんだ。綺麗な響きね」

「そうか。なんか変な気分だな・・・・・・。あまり人に名前のことを褒められたことがないから」

名前を褒められた刻音は照れくさそうに頬を掻き、それからあることに気づいたのか目を薄く細めながら呟く。

「・・・・・・今、初めて我は時の動きを感じる事が出来た。そうか・・・・・・、人の子はこの時の中を生きているのだな。感謝するぞ、レイコ。我はお前と出会ったことで初めて時間の意味を知った」

レイコさんは嬉しそうに微笑む刻音の顔を見つめると、

「そうだ。人界には生まれた日を祝う日があるのよ。今日があんたの生まれた日にしましょう。初めて時を感じた、今日この日をね」

「・・・・・・我の誕生日？」

「えぇ。一年後の今日この時間、あなたの名前を呼ぶわ。そしてあなたの誕生日を祝おう。あなたと私の二人でね」

レイコさんの提案に刻音は心なしか嬉しそうな様子をみせる。

それからレイコさんは刻音の前から去っていく。

それからというもの刻音はレイコが名前を呼んでくれるのをずっと待った。

春が過ぎ、夏が過ぎ、秋、冬と過ぎてもレイコさんは刻音の前に姿を現すことはなかった。

それでも刻音は待った。レイコさんが来るのを信じて。

しかし、いくら待ってもレイコさんは来ない。

刻音の時はあの時から止まったままだ。

積もるのはレイコさんに対する恨みが執念だけであった。

「嘘つきめ！！　いくら待っても来ぬではないか！！　憎い、憎い！！　レイコが憎い！！　名を、名を返せぇぇぇぇ！！！！！」

夏目の頭の中に名前が浮かび、夏目はそっとその名前を呼ぶ。

「・・・・・・刻音、誕生日おめでとう。止まっていた君の時間は動き出した」

すると、黒い影に覆われていた刻音の姿が、淡い光と共に本当の姿に戻った。

禿髪に白を基準とした着物を着た可愛らしい幼い女童の姿がそこにあった。

刻音は消えかけた体を夏目の方へと手を伸ばし、

「・・・・・・ありがとう。夏目、本当の我に戻れた。これでレイコの元に逝ける」

憑きものが取れた穏やかな表情で、夏目に笑いかけた。

夏目も消えかけていく刻音に笑い返した。

「・・・・・・さらばだ、我が友よ。最後に我から贈り物をやろう。しかと、受け取るがよい」

刻音が不敵に笑いながら消えると、夏目の体とニャンコ先生の体が淡い光に包まれ、気づいたときにはそこには夏目とニャンコ先生の姿はなかった。

ただただ桜の枝にとまる雀だけが、その様子を見つめていた。

第零章　時神の贈り物（後書き）

今、夏目友人帳にはまっています。いいよね、うん。次にネギま！と絡みますのでよろしくお願いします。

第壱章　異次元での出会い

――――――――夢を見た。

一人ぼっちで立ちつくす金髪の少女が、俺の目の前で泣いている夢を。

少女はおれの姿が見えていないのだろうか。

それが証拠に少女はおれとは違う誰かの名前を囁きながら泣き叫んでいた。

「――――ぜ、来ない！！　ナ――――、嘘つき！！　嘘つきめ！！　私はもう、誰も信じない！！」

妖精のような美貌を憎しみと絶望に歪ませた、少女の哀しげな叫び声をおれは薄れゆく意識の中で聞いていると、

「――――目、夏目。早く目を覚まさぬか」

不意に夏目は耳元で聞き慣れた声が聞こえるのに気づき、夢の世界から現実へと意識を戻したのであった。

ぼんやりとしたまま視線を横に動かすと、不細工な招き猫のアップが迫るように眼前にあり、夏目は慌てて飛び起きる。

「うわぁ！！　って、なんだニャンコ先生か」

「なんだと何だ、相変わらず失礼な奴め。そう言えば、何やら魘されていたようだが大丈夫なのか？」

「夢？　・・・・・・あぁ、夢ね。確かになんか見たような気がするけど、よく覚えてないみたいだ」

夏目は肩に飛び乗ったまるまると太った不細工招き猫――――、通称ニャンコ先生を見やりながら、未だ寝起きではっきりとしない面持ちで答える。

「そうか。それより夏目。周りの風景を見てみろ」

「・・・・・・？　周りの？」

夏目はニャンコ先生の言葉に訝しげながらも素直に指示に従い、周りの光景に視線を移す。

すると、夏目の目は驚きに大きく見開かれた。

「こ、ここは一体どこなんだ！！　おれたちは原っぱにいたはずなのに！！」

そう、夏目たちがいたのはいつもの原っぱではなく、小高い丘の上であった。背後には見たことのない大きな大木が聳えていた。

眼下には小さく連なる都市が広がり、その手前には巨大な造りの橋が見える。

何時間寝ていたのだろうか？

原っぱにいた頃は・・・・・・、まだ夕暮れ前だったのに、今はすっかり日も暮れ、空には高々と金色に輝く月が浮かんでいる。

ゆうに5時間は寝ていたのだろう。

そういえば・・・・・・、名を返した後はひどく疲れるんだった。

でもニャンコ先生もニャンコ先生だ。

傍にいたなら起こしてくれればいいのに。本当に気が利かない奴だ。

「・・・・・・夏目、声に出ているぞ。お前が寝ている間に、私はここいらを散策していたのだ」

「散策・・・・・・？　そう言う割には口の端から雀の尾が出ているが・・・・・・」

夏目がジト目でそう指摘すると、ニャンコ先生はおおっとと、慌てて口の端から出ていた尾を押し込む。

「まぁ、あれだ。腹が減っては戦も出来ぬと言うであろう。ちょっと腹ごしらえもかねてな。まったく刻音のやつにも困った奴だ。全然知らない場所に送り込むとは・・・・・・」

「刻音・・・・・・。あぁ、あの時神の。ということはここは異次元なのか？」

「まぁ、そういうことになるだろうな。それでどうする夏目よ？　いつまでもここにいても仕方ないだろう」

「あぁ、そうだな。そろそろ移動「誰だ、貴様らは？」？」

夏目がニャンコ先生にそう言おうとしたその時に、不意に頭上から可愛らしくも偉そうな響きの声が聞こえ、夏目とニャンコ先生は声のする方へと視線を向ける。

すると、そこには足首まで届く金髪を靡かせながら空中に浮かびながら、不敵な笑みを浮かべる小学生くらいの少女の姿があった。

その横は足の裏から火を噴きながら空を浮かぶ、ポーカーフェイスの少女がまるで付き従うように背後に控えていた。

夏目は頭上に浮かぶ少女を見つめ、ふと脳裏に映像の断片が流れ込んだ。

だが夏目にはそれが何なのか一向に思い出せない。

ウンウンと唸る夏目を尻目に、肩に乗ったニャンコ先生は空中に浮かぶ少女？　たちに向かって声をかける。

「お前たちこそ、いきなり現れてその口の利き方は何だ？　頭から喰ってしまうぞ」

「何だと貴様！！　ぶさ猫の分際でこの真祖の吸血鬼である私に生意気な！！」

「真祖の吸血鬼？　ふん、西洋ものが偉そうにするな。私より格下

の癖に」

「何だとぉ！！　茶々丸！！　こいつらを捕まえろ！！」

「了解しました、マスター」

と、ニャンコ先生の上から目線の発言にブチ切れた少女は、背後に控えた少女にそう命令を下す。

緑色の髪を持つ少女が凄まじい勢いで、こちらの方に向かってくるのに気づいたニャンコ先生は夏目の肩からポォーンと飛び出し、ボフン！！　という軽い音と共に元の姿に変化する。

そのまま未だウンウン唸って考えている夏目の襟首を噛み、地を飛ぶように駆け抜ける。

ニャンコ先生――――、もとい斑の姿は少女たちには見えないのか、夏目が宙に浮きながら移動しているという奇天烈な光景しか見えてない様子のようで。

「おい！！　あのぶさ猫は！？　どこに行った！？」

「マスター、少年が宙に浮かんで移動しています」

緑髪の少女が指さしながら金髪の少女にそう伝えると、

「何ぃ！！　おい、追うぞ！！」

「了解しました、マスター」

金髪少女は羽織った黒いマントを翻しながら、宙を浮かびながら移動する夏目のあとを追いかけるのであった。

ズザァァァァ！！　ザッ、ザァァァァァァ！！

夏目を口に咥えて草をかき分けながら走る斑は、時折後ろを振り返りながらあの少女たちが追いかけて来ていないか伺うと・・・・・・。

案の定、もの凄い形相で追いかけてきていた。

夏目は頬を嬲る風の感触に我に返ったのか、元の姿に戻ったニャンコ先生の口に咥えられていることに気づき、驚きを含んだ声を上げる。

「にゃ、ニャンコ先生！！　ど、どうしたんだ？　一体？」

「お前は本当におめでたい奴だな、夏目。吸血鬼の女童に追われているのだ」

「はぁ？　なんでまたそんなことに？　さては、先生。また相手を怒らせるようなことを言ったんじゃないだろうな？」

「言っておくが、先に言ってきたのはあいつらだからな。私はそれに答えただけのこと」

自分は悪くないという風にしれっと答えるニャンコ先生。

言い合っている最中にも、少女たちは憤怒の表情を浮かべながら

追いかけてくる。

しかし、このまま逃げあうだけでは埒があかない。

いっそのこと早々に誤解を解いた方がいいのではないか？　と考えた夏目は自分を咥えて走る先生に、

「先生！！　おれを下ろしてくれ！　あの子たちに話をつけてくるよ。このまま逃げていても仕方ないだろう？」

「うむ・・・・・・、それもそうだな」

と、夏目の提案に賛同した先生は橋まであと一歩手前の所で夏目を落とし、自分もあの不細工な招き猫の姿に変化する。

そのすぐ後に少女たちは夏目たちの前に姿を現す。

どうやらまだ怒っている様子。

どんだけ失礼なことを言ったんだ先生・・・・・・。

ニャンコ先生のことを内心呆れつつ、夏目は目の前に立つ少女たちに歩み寄る。

少女たちは自分たちの方へと無防備に歩み寄ってくる夏目を見て、不審そうに目を細めて見つめる。

「誰だ、貴様は？　あのぶさ猫の飼い主か？」

「おれは夏目貴志。ぶさ・・・・・・、いやニャンコ先生の飼い主

じゃないよ。それと先生がなにか失礼な発言をしたようで、おれから謝るよ。本当にすまなかった」

夏目はペコリと頭を下げる。

少女も素直に謝る夏目を見て、興が削がれたのか困惑した表情を浮かべる。

「ま、まぁ素直に謝るなら許してやるが・・・・・・。それはそうと貴様ら、いったいどうやってこの魔帆良学園に侵入した？」

「魔帆良学園？　おれたちはその・・・・・・、なんて答えたらいいのか」

流石に異次元から来ました、なんて言えないよなぁ・・・・・・。

夏目が言いにくそうにしていると、金髪少女は不敵な笑みを浮かべ、

「まぁ、答えられなくても別にいい。私の仕事は貴様らを捕まえて、あのジジイの所に連れて行くだけだからな」

・・・・・・えぇ。

少女のとんでも発言に夏目が固まると、

「だから信用ならんと言ったであろう？　西洋の妖は」

と、やれやれと言った口調で呟くニャンコ先生であった。

さてさて、夏目たちが少女たちに連れてこられたのは、魔帆良学園の中でも相当な規模を誇る魔帆良女子中学校校舎の中にある学園長室であった。

ここにこの学園内で一番身分が高い人間がいるらしいのだが・・・・・・。

いざ、中に入ってみると・・・・・・。

「なんだ。人かと思ったらぬらりひょんではないか」

肩に乗ったニャンコ先生がそう呟く。

その言葉を聞いたぬらりひょん？　を除く全員がプッと吹き出した。

「あ、あの～、ワシはぬらりひょんではないのじゃが。これでも人間なのじゃが」

と、ぬらりひょん扱いされた老人は額に青筋を浮かばせながら言うと、

「なんじゃ、つまらん。せっかく妖に出会えたと思ったのに」

ニャンコ先生はさもつまらなそうに言う。

「こ、こらっ！！　先生、失礼だろ！！　すみません。先生の代わりに謝ります」

と、夏目がペコペコと何度も頭を下げる。

老人は何度も頭を下げる夏目を見て、構わないという風に手を上下に振った。

「あぁ～、別に気にするでない。それより、本題にはいるが・・・・・・、君は一体どこの誰じゃね？　この学園にどうやって入ったんじゃ。ここには結界が張っており、容易に外部の人間や人外の者は入れぬようになっておるのじゃが・・・・・・。エヴァの証言によると、君たちは既に学園の敷地内に入っていた様子らしいの」

と、手を組み真面目な表情でそう尋ねてくる老人に、夏目は思わずゴクリと生唾を飲み込む。どう答えて良いか悩んでいた夏目の代わりに、物怖じしないニャンコ先生が答える。

「それには私が答えよう。答えは至って簡潔明瞭だ。私は時神の力でここに送られただけのこと」

「時神とな？　そうか、確かにあの者なら可能であろうな」

「学園長、知っているのですか？」

と、学園長の横に立つ眼鏡をかけた渋めの中年男がそう尋ね返す。

「あぁ、知っておるとも。まぁ、ワシがまだ若かりし頃に一度だけ会っただけじゃがの。そうか、それで時神は元気かの？」

「時神は今この世にはいない」

淡々と答えるニャンコ先生。それを聞いた学園長はそうかと短く答える。

時神の消滅を惜しむように黙った学園長は、それから夏目の方へと視線を向け、

「さて、それで君の名は何という？　人外のものを連れているだけあって、ただの人間じゃないことは分かるが・・・・・・」

「・・・・・・おれは夏目貴志っていいます。おれは人外、つまり妖が見える能力を持っています」

夏目は学園長の視線を真っ向から受け止め、静かな口調で質問に答えた。

「・・・・・・なるほど。夏目友人帳という物を用い、そこに名を記された妖怪を自在に使役できると」

「はい。祖母が負かした妖の名前がここに書かれていて、おれは妖たちに名前を返していっているんです。それが出来るのは孫であるおれだけなんです」

と、ザックから取りだした友人帳を手に夏目がそう説明する。

すると、肩に乗ったニャンコ先生が会話に口を挟んできた。

「そこで私がこいつが死んだら友人帳をもらい受ける約束で、こいつの用心棒を引き受けているのだ。先程の説明通り、この友人帳を

狙ってくる妖も多い。人間では相手にならない妖もいるのでな」

扉に背を預けていた金髪少女はニャンコ先生の言葉を聞いた瞬間、プッとさも可笑しそうに吹き出した。

少女の笑い声に気づいたニャンコ先生はキッと、目を逆三角形にして睨み付ける。

「おい、そこの女童よ。何が可笑しい？」

「ぷっ、貴様みたいな達磨みたいなぶさ猫が用心棒だと？　ははっ、笑わせるな」

「なにを～～～～！！　この姿は仮の姿で、本当の私はそれはそれは美しいのだぞ！！」

「ふん、何を言う。達磨猫。もう少し痩せてから言ってみろ！！」

と、鼻で笑いながらニャンコ先生の頬をグニョ～ンと引っ張る金髪少女。

そんな一人と一匹は置いておいて、話を進めていく夏目たち。

「・・・・・・まぁ、そういうわけなんで、おれたち帰る方法が分からないんですよ。行くアテもないし・・・・・・」

「ふむ、そうか？　なら、帰るメドがつくまでここで住み込みで働くというのはどうじゃ？」

と、学園長の破格の提案に夏目は一も二もなく飛びついた。

見ず知らずのおれにここまで親切にしてくれるなんて・・・・・・、と夏目は学園長の懐の大きさに感動した。

「は、はい！！　よろしくお願いします！！　ところでおれは一体何をしたら良いんでしょうか？」

「ふむ・・・・・、そうじゃの。じゃあ、女子中学の先生をやってもらおうかの？」

と、顎を扱きながらさらりと答えた学園長に、

「――――――――はぁ？」

と、夏目は間の抜けた返事しか言えなかった。

その後ろでは少女とニャンコ先生が激しく喧嘩していたのであった。

第壱章　異次元での出会い（後書き）

今日はここまでです。意外と難しいな・・・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4731z/

麻帆良友人帳

2011年12月17日23時46分発行